



The University of Human Environments Academic Repository

学位の種類	博士(看護学)
報告番号	甲第27号
学位記番号	看博第27号
氏名	星 貴江
授与年月日	令和6年3月14日
学位論文題目	助産師基礎教育における硬膜外麻酔分娩に関する教育プログラムの作成と検証
審査委員	主査: 杉下 佳文 副査: 伊藤 千晴、松原 紀子

・学位論文内容要旨(和文)

Key Words: 硬膜外麻酔分娩, 助産師教育, プログラム

I. 研究の背景

近年, 出産に対する女性たちの多様なニーズから硬膜外麻酔分娩での出産を志向する妊産婦が年々増えており(日本産婦人科医会, 2018), 2018年に「無痛分娩の安全な提供体制の構築に関する提言」が取りまとめられ, 無痛分娩の質と安全性の向上を実現するためには, 人材の養成が必要不可欠であり, 医療スタッフの研修体制の整備に関する提言がされた(厚生労働省, 2018).

助産師は, 従来「自然性を尊重し, 自然な経陰分娩を介助する」ことを基本とした業務を行ってきたため, 無痛分娩に対する助産師の意識は低い(濱, 2006; 三國, 2005). 硬膜外麻酔分娩は自然な経過の分娩と比べより高度な知識や実践能力が求められ, 妊産婦に寄り添いケアを行う助産師にとって, 硬膜外麻酔分娩に関する教育は必要不可欠である. 日本における無痛分娩に関する助産師基礎教育は24%程度しか行われていない現状がある(三國, 2005).

本研究では, 助産師基礎教育課程修了時の学生への硬膜外麻酔分娩に関する教育プログラムの作成と検証を行い, 教育の充実を図ることで助産師の実践能力の強化ができ, ひいては助産ケアの質の向上ができると考える.

II. 研究目的

助産師基礎教育課程における硬膜外麻酔分娩に関する教育内容を抽出する. そして, 助産師基礎教育における硬膜外麻酔分娩に関する教育プログラムを作成し, 検証することである.

III. 第1次研究: 助産師基礎教育に必要となる硬膜外麻酔分娩に関する教育内容の確定

研究1-1. 硬膜外麻酔分娩に関する助産師基礎教育における教育内容の文献検討

目的: 国内外の書籍から硬膜外麻酔分娩に関して助産師教育に必要となる教育内容を抽出する.

方法: 過去10年間の国内外の助産師教育に関する書籍から, 硬膜外麻酔分娩に関して助産師教育に必要となる教育内容を抽出した.

結果: 国外10件, 国内6件の計16件の教科書および参考書から, 硬膜外麻酔分娩の概要, 硬膜外麻酔分娩時のケアについての教育項目を計31項目抽出した.

研究1-2: 助産師基礎教育に必要となる硬膜外麻酔分娩に関する教育内容の抽出

目的: 助産師基礎教育に必要となる硬膜外麻酔分娩に関する教育内容を抽出する.

方法: 質的記述的研究デザインである. 対象は, 大学院助産師養成課程の教員5名および硬膜外麻酔分娩実施施設の勤務助産師5名の計10名とした. 基本的属性および助産師基礎教育において卒業時最低限必要となる硬膜外麻酔分娩に関する教育内容および到達目標についてインタ

ビューを行った。

結果:研究参加者計 10 名のインタビューデータから、硬膜外麻酔分娩の教育内容として、3 の大カテゴリ【硬膜外麻酔分娩の概要】、【硬膜外麻酔分娩において助産師に求められるケア】、【医師への信頼と協働と連携】が抽出された。また、硬膜外麻酔分娩の教育の前に習得しておく必要がある教育内容については、3 のカテゴリ《基本的な産痛のメカニズム》、《自然性を尊重する助産師の理念》、《自然分娩を基盤とした麻酔分娩の教育》が抽出された。

考察:教育内容として《硬膜外麻酔分娩の概要》、《硬膜外麻酔分娩において助産師の求められるケア》を理解し、医療介入のある分娩方法であることから自然分娩とは違い《医師への信頼と協働と連携》についての教育が必要であることが考えられた。また、硬膜外麻酔分娩を学習する上では《自然分娩を基盤とした麻酔分娩の教育》、《基本的な産痛のメカニズムの知識》、《自然性を尊重する助産師の理念》を理解していることが必要であり、ローリスク分娩を学習し助産師教育の基盤をつくり、その後硬膜外麻酔分娩の教育をすることが必要であると考えられた。

研究 1-3:硬膜外麻酔分娩に関して助産師基礎教育に必要となる教育内容の確定

目的:研究 1-1・1-2 から抽出した硬膜外麻酔分娩に関して助産師基礎教育に必要となる教育内容をまとめ、コンセンサスを得る。

方法:量的記述的研究デザインである。全国の助産師養成課程の教育代表者 216 名に対して、計 39 項目の教育内容についてまとめた質問紙を作成し、デルファイ法を用いて収斂した。本研究では、郵送法にて行い、ラウンド数は 3 回とし探索的な調査であることから同意率は 51%とした。

結果:216 名のうち第 1 回目調査では 65 名(30.1%)、第 2 回目調査では 52 名(24%)、第 3 回調査では 43 名(19.9%)の協力が得られた。3 回の調査において計 39 項目の硬膜外麻酔分娩に関する助産師基礎教育内容のうち 35 項目が 51%以上の同意率が得られた。

考察:39 項目中 35 項目について 51%以上の同意が得られており、概ね教育内容として妥当であったと考える。合意形成が得られなかった項目については、項目「費用について」は自由診療であるため施設により違いがあることにより同意率が低かったと考えられる。また、硬膜外麻酔分娩のメリットである「産後の早い回復」、「出産の高い満足度」については、産婦の主観的な評価であること、また国内外の研究によるエビデンスが十分普及していないことが考えられた。

IV. 第 2 次研究:硬膜外麻酔分娩に関する助産師教育プログラム作成

目的:硬膜外麻酔分娩に関する助産師教育プログラムを試案する。

方法:介入研究(前後比較試験)である。研究1の結果から抽出された教育内容について、学習目標を設定し、助産師養成課程に在学するローリスク分娩の講義が終了している学生 15 名に対して行

った。プログラムは、講義形式で1回とし、時間は120分の講義形式を予定した。プログラムの実施前後に確認テストを行い、受講前後でウィルコクソン順位和検定にて分析をした。また、質的データは、質的記述的分析を行いARCSモデル(Keller, 1987)を使用し学習者の学習活動への満足度を評価しプログラムの評価を行った。

結果：研究協力者は、助産師養成課程計5施設の計15名であった。助産師養成課程別では、大学院が13名(86.7%)であり、学部2名(13.3%)であり、全員最終学年であった。教育プログラム受講前後のテストの得点は、有意に上昇していた。硬膜外麻酔分娩に関する教育プログラムを受講し興味・関心、学びは、12のカテゴリ「硬膜外麻酔分娩の普及への関心」、「硬膜外麻酔分娩の方法や流れへの関心」、「硬膜外麻酔分娩のデメリットへの関心」、「硬膜外麻酔分娩時の助産ケアへの関心」、「多職種連携への関心」、「助産師が硬膜外麻酔分娩を選択する妊産婦を支援する意義」、「麻酔や麻酔分娩に関する既存の学習の振り返り」、「硬膜外麻酔分娩時のケアへの自信」、「教育プログラム受講後の新たな学習意欲」、「硬膜外麻酔分娩に関する知識の活用」、「学びを深めることができた満足感」、「就職前に学習できた満足感」が抽出された。硬膜外麻酔分娩に関する助産師教育プログラムの評価は、5つのカテゴリ「プログラムの内容や教材・難易度・時間はよかった」、「硬膜外麻酔分娩時のリアルな助産師の動きや産婦の様子をみたい」、「レディネスを踏まえた学習時期の設定」、「学内演習の可能性」、「スライドの改善」が抽出された。

考察：教育プログラム受講前後の得点数が、受講後に有意に上昇し、教育プログラムを受講し知識が得ることができたと考えられる。対象者は教育プログラムを受講し関心や満足感を抱き、学習意欲の動機付けがされていたと考えられる。特に硬膜外麻酔分娩を選択した妊産婦にケアをおこなう当事者としての主体的な意識を持ち、「助産師が硬膜外麻酔分娩を選択する妊産婦を支援する意義」を見出し、ケアの重要性を認識し学習の動機付けがされていたと考えられる。プログラムの課題としては、「硬膜外麻酔分娩時のリアルな助産師の動きや産婦の様子をみたい」という意見があり、分娩見学や介助をする機会が少ないためニーズがあったと考えられる。

#### V. 第3次研究：硬膜外麻酔分娩に関する助産師教育プログラムの検証

目的：硬膜外麻酔分娩に関する助産師教育プログラムの検証を行う。

方法：研究2において作成したプログラムの時間を短縮し、さらに助産師のケアの動画を取り入れ精選し、硬膜外麻酔分娩に関する助産師教育プログラムの検証を行った。助産師養成課程の学生5名に対し、硬膜外麻酔分娩に関する助産師教育プログラムを実施し、検証した。

結果：教育プログラム受講前後のテストの得点は高くなっていた。硬膜外麻酔分娩に関する教育プ

プログラムを受講し興味・関心、学びとして、【再認識した助産師基礎教育における硬膜外麻酔分娩の教育の必要性】、【臨場感がある模型や物品・動画で実際のケアの理解】、【硬膜外麻酔分娩時の助産師の役割の理解】、【麻酔の副作用や合併症に関する学びと関心】、【助産師としてのケアの自信と学習への意欲】の5つの大カテゴリが抽出された。硬膜外麻酔分娩に関する助産師教育プログラムの評価は、【正常分娩を基盤とした実習前の硬膜外麻酔分娩の学習へのニーズ】、【講義形式へのニーズ】の2つの大カテゴリが抽出された。

考察: 今回の教育プログラムは既習の教育内容であったが、対象者の助産師としての役割の理解やケアを再認識し、学習意欲の動機付けがされていたと考えられる。自然分娩の学習が十分行われ、実習が開始するまでには学習を終えておく必要があると考えられ、講義と実習とのバランスを考慮する必要がある。また、正常分娩よりハイリスク分娩である硬膜外麻酔分娩では、イメージがでないことを多くあり、施設によって方法が違うため、基本となる知識の習得が重要となり講義のみで十分であると認識していたと考えられる。

## VI. 倫理的配慮

人間環境大学倫理審査委員会の承認を得て行った(研究 1-2:N2020N-01, 研究 1-3:N2021N-005, 研究 2.3:2022N-012)を得て実施した。本研究に関連して、開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

## VII 全体の考察と今後の課題

硬膜外麻酔分娩の教育は、分娩の基盤となる自然分娩の知識や硬膜外麻酔分娩で併用される分娩誘発や分娩遷延の知識等の習得が必要であり、その教育を含め硬膜外麻酔分娩の助産師教育プログラムが成立すると考える。

そして、硬膜外麻酔分娩の教育内容としては、硬膜外麻酔分娩に関する概要、硬膜外麻酔分娩に関する助産ケア、多職種との連携は必要であり、映像教材の活用は硬膜外麻酔分娩の助産師の役割をイメージすることができ本プログラムは教育効果があった。また、硬膜外麻酔分娩に関する助産ケアを理解することで、助産師としての役割を広く捉えることができ、助産師としてのアイデンティティ形成の可能性が示唆された。助産師養成課程の修業年限や実習状況によって違いがあるため、他のカリキュラムの関係を考えながら教育内容を検証していく必要がある。また、硬膜外麻酔分娩に対する助産師教員個人の価値観が教育内容に影響を与える可能性があり、今後対象者を増やし研究を重ねていく必要がある。

学籍番号 9117006	学生氏名 星 貴江
学位論文題目 助産師基礎教育における硬膜外麻酔分娩に関する教育プログラムの作成と検証	
<p>本研究は、助産師が行うケアに賛否両論あり、関連学会等で議論的になっている硬膜外麻酔分娩に関する研究である。本研究の目的は、助産師基礎教育の充実を図るため助産師基礎教育課程修了時の学生への硬膜外麻酔分娩に関する教育プログラムの作成と検証を行うことであり、研究の意義は、教育の充実を図ることで助産師の実践能力の強化ができ、ひいては助産ケアの質の向上ができることである。</p> <p>第1次研究では、助産師基礎教育課程における硬膜外麻酔分娩に関する教育内容を国内外の文献、助産教員および臨床助産師から抽出し、第2次研究は、第1研究で抽出した39項目の教育内容を全国の助産教員にデルファイ法を用いて収斂した。その結果、35項目に同意が得られた。次に、35項目を基に作成した教育プログラムを助産師養成課程に在学するローリスク分娩の講義が終了している学生15名に対して教授した。プログラムの実施前後に確認テストを行い、量的に分析をした。また、質的データは、質的記述的分析でARCSモデル(Keller, 1987)を使用し学習者の学習活動への満足度を評価しプログラムの評価を行った。評価は概ね高い評価が得られた。しかし、プログラムの課題に受講生は分娩見学や介助をする機会が少ないため「硬膜外麻酔分娩時のリアルな助産師の動きや産婦の様子をみたい」というニーズがあった。第3次研究では、第2次研究の教育プログラムより出された課題に対し、動画作成を取り入れたプログラムに精練した。助産師養成課程の学生5名に対し、精練された硬膜外麻酔分娩に関する助産師教育プログラムを実施し、検証した。</p> <p>硬膜外麻酔分娩の教育内容は、「硬膜外麻酔分娩に関する概要」、「硬膜外麻酔分娩に関する助産ケア」、「多職種との連携」が必要であることが明らかになった。また、映像教材の活用は硬膜外麻酔分娩の助産師の役割をイメージすることができ、本プログラムは教育効果が得られた。さらに、硬膜外麻酔分娩に関する助産ケアを理解することで、助産師としての役割を広く捉えることができ、助産師としてのアイデンティティ形成の可能性が示唆された。</p> <p>研究計画において第2研究のボリュームが多く、研究の段階的な設定と妥当性に課題が残ったが、得られたデータを丁寧に分析し、精練された教育プログラムの作成を行うことができた。考察において、理論的な解釈を広く理解できるように丁寧に記述することができれば、さらに汎用性の高い硬膜外麻酔分娩に関する教育プログラムに関する研究となる。また、1回の講義内容ではなく、教育効果の影響等を検証する継続的あるいは段階的な教育プログラムの作成であれば、研究課題に沿った良い研究論文になった。全体的な研究目的達成までの一連のプロセスは一貫性があり、近年のトレンドや今後の助産学基礎教育の課題解決を担う社会的価値の高い博士論文である。</p>	
2024年 2月 14日	
論文審査委員会 主査 教授 杉下 佳文	
同 副査 教授 伊藤 千晴	
同 副査 教授 松原 紀子	